前回の「つぶやき」では、七夕に関して「梶の葉」の話を子どもたちにしたことをお伝えしました。子どもたちにお話した後、教員室で天野教頭と梶の葉について話をしていたところ、面白い事実が分かりましたので、今回はそのことについてご紹介いたします。

梶の木には実（じつ）は実（み）がなります。食べるとかなり甘く、ねっとりしています。天野教頭もそれを知っておりました。横文字をやたらと使うキザな!?教頭かと思いきや、愛犬のボストンテリア（オス）のトッピー君を、森の中で散歩させるのが趣味のひとつという、なかなかの自然派。植物や鳥の名にもかなり造詣が深い教頭です。

その天野教頭曰く、「トッピーを散歩させていると、桑の実や梶の実が落ちているところで、その実に体をこすりつけることがある。」とのこと。

「ウ～ム。」私の頭の中にあることがひらめきました。

「猫に木天蓼（マタタビ）」ということわざがあるように、昔からマタタビは猫の大好物と言われてきました。猫にマタタビの葉を与えると、葉をなめたりかんだり、葉に頭や体をこすりつけたり、さらには床に転がって、酔ったように体をくねらせたりすることを「マタタビ反応」と言います。

二〇二一年一月二十一日の朝日新聞などに紹介されていた記事によると、「ネコはなぜ、マタタビにすりすりと体をこすりつけるのか。ネコにまつわる謎の答えを、岩手大や京都大などの研究チームが実験で突き止めたと発表した。」とあり、要は、マタタビに蚊を寄せ付けない成分が含まれていて、それを体につけるためなのだそうです。研究チームは、マタタビの葉をすりつぶして、含まれている成分を分離し「ネペタラクトール」という成分が、蚊を寄せ付けない効果を持つことを突き止めたのだそうです。ネペタラクトールをネコの頭に塗って蚊を三十匹放つ実験をしたところ、蚊が頭にとまる数は、何も塗らない場合と比べて半減したとのこと。

若かりし頃読んだ本の中に、ネコの「マタタビ反応」は、ライオンやヒョウ、トラにも起きる反応で、マタタビだけではなく、「マタタビラクトン」を含む、キウイの葉や枝でも起こると書いてあった記憶があります。

サバンナでライオンの群れに囲まれた時、キウイの枝を大量にばらまき、ライオンがゴロニャン(ゴロガォ～!?)となっている隙に、脱出することを何度夢想したことか。それだけではなく、ライオンは象の糞にも「マタタビ反応」を起こすらしく、象の糞をネコに与えてみたいと、今でも密かに思っています。

トッピー君が桑や梶の実に体をこすりつけるのには何らかの意味があるのではないか。桑や梶はクワ科の植物。何らかの薬効があるに違いありません。ネペタラクトールを使った新たな蚊よけ剤の開発も考えられているという現在、これは「ビジネスチャンス」かと、天野教頭の話を聞きながら、一人妄想しておりました。もっとも、このチャンスを生かすすべもありませんが…。

俗説として、疲れた旅人がマタタビの実を食べたところ、また、旅を続けられるくらい元気になったということで、「また旅」と名付けられた言われる「マタタビ」。十三日から一年生と六年生が旅（キャンプ）に出発します。コロナ禍のためのブランクが子どもたちにどのような影響を与えているのか、教職員一同開始前から心配しています。

普段の快適な生活から離れ、適度な不足や不満の起きる環境に子どもたちを置くのがキャンプの意義でもあります。特に一年生には、集団生活のルールを一つひとつ教えていくことになります。友達と協力することの楽しさや、わがままを押さえて、友達のために少しだけ我慢することが、「人を愛する」ことにつながるということを、心と体で体験してきてほしいと願っています。皆様もどうぞ充実したすてきな夏休みをお迎えください！

（立教小学校校長　田代　正行）